伊地知文庫
文庫20
205
1

至寶抄

伊地知氏書冊

竹村紹巴

それ連歌ハむかしよりひとへに社定まりし一流に
肝要ハいかなる物とありても絶こなき代々の連歌を
御くれそゝらん事大きなる事すんぞ古き人の申されしも
名人の菖蒲ハ水とふくかくすきてと見へ
やうに仕立へきやうしか付わひあわひの事にさて
内しも聞事有てすなハ古今の序も人の心とお
種としてよろつの言の葉とそなれりける然るに人
唯今そ作り残さて思ひ作事と作出事ハ
どのつく古奇の仏ものも何人唐ものも日本の
奇のきとく詩を作りん多きて物草木の

四季恋述懐の言葉とえらひそみに自然の人
の言葉也もの遠く詠歌の大概は定家卿の哥を
よむやうとあらはしをかれ候その言葉にも情は新きを
もとめ言葉は古きをもちゐて可用と云
和哥に聊違ふ古き哥ともいくつも所々に有古
き言葉と覚えぬ事なく御覧しきとくの秘ことを御座
候是こそ心の内にて連歌の昔の人の哥とそ宿
歌の如く古今集と始て世々の言葉も書
世皆一事にてその外の人の誠の言葉の讀様よ
よりて能覚えたと定家卿とかく茶湯なりとも
命有内にいはれける古道具をあつる

宗祇の連歌一作事右の中は定家卿の心は
おのれは連歌も茶湯もその時によりて一様
なれとも昔より去嫌一段きびしくなり付所も細よ
く候中は如此連歌は只言葉の縁のことより付ん
大形の句先を見入るの心をといゆる付とて嫌也す
る事に付て中は如此連歌は哥一首と二つは
分て百韻となり中は此言葉哥とも連歌と申侍
中は哥の上の句に下の句を付るとも下の句よ
て上の句をつけ候事は連歌は一句くりよ其断
一字なりて付るをかん能も一句の心にて
て賞翫ゆうげんに前句への付りよく候也

やうに又三百めかけたる時も此より外の事はなく候
抑合の事は挽毫も又いこう老後法仕るは左して
此きかけまたなり殺百のき事三々に稽古仕
て無いよきして習ひ入んかく出付にハ又ま一統り
年たとも中事久まちてひ表も大風吹大雨降た
る之風も物音ありるやうは仕る所表の日を
事ありてみるへき花の此入合ともいふ無禁し
きやうに中おうる又花の年ことといふりれと云り
中にハ桜のうすむく作入て桜花と申てハ盃花の
なる又ハ又されは桜と付候り此名桜花と了
たまへ同面は桜と云ふ仕る賞翫と申て一粒は

伊十

花は春人ハ老なしてハ平人ハ斟酌わたすへり
一おの内無く花と肝要に仕て君よく思案とすへて
下任也花は初中後のみ稽古をとしのうちに意
稽古ありてハ花のおくまてとひかくらひ表立
ぬまハ桜も枝は雪の情けまて花をそはけなる
おもひやりて又このめ表面打そく花といくか中せて
か咲あるとも見えんとまり花しとやすく桜の
おのかに名めくと見えくハ一花ひとまれは天下の表
とそ表り又ハ都のそこの家なる桜さ花ものころ
ぬらしときて花見車の前後枝と列絵月注
其もたらる桜ひあらひハ山里に契あり花も

咲けりとつげ来る使よりはやくまゐるに数寄者
の下に青氈しきくのみそひ春の日ぐらし
とともに梅の花さくは花の下ぶし
て朧月夜にもまさるものはなしといふ文
花のいろ香のあやをとへまさりぬ花といひさだむ
御まよひのいろふかくとも見ぬ人のふるさとに
むかしは花のかげよりやなんするとおもひ立て
おしきれとなくてよりか待ちひくのかざつと
なつくしひく文章短冊をとそへてこと里
文字流しとつましうへもまた国と問ひて
と自ら手すいあすい雪とふりなん事をおもひ去

と書に梅の花はまさりの花と見てくも世
の中にもさるべき事と覚へ何時も珠の花もありとて
あらぬ深山の花もさては人も言葉のくま
のとそ梅とみてくれ初花なりも梅めつしくれ
まひ春と書きつまいせめてくゞまれと見えて
夜と花の名よそめしろそかへの日に梅の花
の袖とめぐさくへん事ぞかつ見て又来まさぬの花
藁の紅の見ゆるとも花の名残そと折りけれ
咲るの初花にやめてを後花と花にみや
のころ夜の歌にみゆるさまをもて歌
言葉やうく晴れるもいひ歌は詠まなう

奥ゆかしきよし申作文時鳥は一聲まちて初音
なども稀にはきゝめづらしく鳴音あるやうにおもふこと
あるゆへ也細石の浜は朝の月日のかげとも
見えず道行人のうたひもなく水さへもくもりて
野山とも海とも見えずして屋結ふ物までも感じ入さや
又秋は常よりも見る月を一入ひかりわたりやうく面白
く宿はなけれど四季ともとく宿をとし又秋は志多く
して草のゆかしき本なども書かきなどせしむる住居の
みんなは秋の人によりあはまりぬれ
き事をおそれ入なども野山の文をかり物にひ
ろく記しなる新秋の折にも秋の詠をき

めでたくはかなき人をも曉の様さへおかしと書
し去方行末の事など思つゞけまゐらす
さ夜ふかく冬を長夜の暁時雨のおときゝとし
て一と代の里路ふしてまへは晴なきのひとへくし
月の行末にはさらなり板屋の軒端の
庵のうちにおもしろき斜住居人又雪と共
山の端奥山里などは梅の咲里に帰の
外をまきし住家の人の袖をくるむ
梅も都の色香はめづらしく初雪落雪れと
見とりわけすゝむ事などまじる住人も詠
歌とも都人になしきみてふなめく勝手詠長

逢ハ逢坂山乃実とあし逢ハ関の門并ゆく末に紙
く想像海に漕お乃扚して都の山と浪り
めへ見てくなつかしく昨乃子の簾すら月日
とも遠ふ猶りの扨く野路山路の聴ね声々
恋しひ思草乃枕の夢の中にも玄刃乃ろ方のに見
えけるもおぼえぬきハ松風うつなをの音と恨
人やまちまつぬ行かうら遠くともあうらすと悔き
悔のさみは鬢もやせうまし麻乃さ衣も差綻
まそ恋女は安く恋見ん恋待恋思恋逢恋別
恋恨恋と歟く世のならハしを人にあひ
ぬまくやうみはふみ行やむ恋とは思ふさ見ぬ人

と風のたよりにやすらてもたる物もとおもひて
なりかはりたよりとそのと一筆と云侍るなり
見る恋は杉なさるに道のゆかりむしろ車恋
まそれのひさしも見ん初めさるに家の簾几帳の毛
より垣に見き沖王箋まてしりるちよりも式と
思ふんれ世待恋ハ年月ちるまでも悦くもなふ
うや障りまはやまてをるも二日乃内に千年とふ
くらして待よるよ萩の葉の音風花落のまま
経とも君のつはもひの暮になまいきふる
ひく門のかたりに音やもとひ鳥帯のちぬよ
もそくはしてよかりとうる見待よひの鐘

のあわぬおの為は物の数せとわきまへし思慮は
ゆるへかひくととそても人もんひとけ清かわうくんめ
志けく世のやえもらぬ所も立後り又一篇
のふこ母とう紀名のまんと作なり又色恋
は年月の思ひの末ととき志とはわなりのくを
志川め鍾かそくとうくを五臓やの中をよし

琴

あみさ南よ清くろひあし物しを月あるう
まちは琴きりうてとん立て清しかのりわにら
やそとへ万夜の袖と引揺やの中へいさなひ合
まくこうらけなまハみまうひよそううしつうを
なしとりあへとそうふつとさむしろのよふ枕

となくへてう南下ひり清まなかりしととやく
といひちくいよくくをとうらとく南う清めるす
わさかへまたなさけおのひや所へ一別恋い南さ
南とひ為へもとひ母君金帝めとしのひ息か
衣とろかひよわひわふちうりなきはやうくま
山まんるをとう形見秋の歌の手枕と一紙り
なしてめるともわくましきうしといひけり為
のら色うよの春の鳴れといきくると恨くと
おくえい川わひかん事を松はつうく袖の
なすさき世紀あへとをやうく月をいうくまあり
志のめのくらんはそく引わ南南ちうる

くらゐくのわことを書てもひとん道理を作り眼應ハ
とゆう志れ於はさりやまり常しくちこさりそく
中も人のうひすふらり継りの事とうしみ又ハ我
ちぬさ於人まうちひめうと世の中の事として
くこうわ於その本意を数すくね我力とうく
むうちりうわひすくましん里とちてきりし中
そもむすしき紅井は根の喜忍を剣二紅りくる
人といきうひのうしみやむすなし猜ふし
をひなうく中井もとこしの梅さといひ然
根忍事わ里とみハおまる里流まなつきんと
ちひくむすしくなり人ハいきとん誹んとの

あしくおもきやなりくも心となや〻をとるすれ
し
發句の事第一に対句に遠やう肝要也發
句首韻の初より尾りまでもよけ〻ねく掛るべん
よくひゝめみなれやうし發句ハ切字と申す
咏されたるなく一反年句おおもりえくわしくく
四季の外雑の發句と申事ハ無沙座に飛
消も同前
○きれ字の事

郊

一月の伏花の書うわしめ部

宗祇

一 山や嵐それのあをミ河霧の海し　同

一 聞えし秋の河音も絶しわさなさそ　同

一 萩さけとむすひそ露のしらり　尚順

一 萩のえをくたる露のかな小鉢とまし　智蘊

一 暮そへは萩の花見ぬ垣もなし　ものゝ帰　宗祇

一 おもふ沢と秋山すかぬしゑと帰　たる　同

一 月原人も風を待たれさらり　ね　同

一 秋たけぬ松のたもとの松河風　同

一 紅葉せぬ秋を惜し雪丸雲　志む　宗砌

一 おもひともむしろは荻の小夜衣　宗祇

一 松の葉もかき出す秋と荻の声　と　同

いそ
一 秋は月ゆふすゞ江の中庭　宗祇
いさ
一 若葉より白妙もさく梅の花　同
よ
一 梅か香よ名残おしむも深川かな　同
行
一 そめいろ岸ゆふすゞの浅みより　同
いそ
一 春も秋とやく若葉の落紅葉　肖順
いく

一 見すもわかぬ富山に入朝霞　宗祇
こそ
一 真の見ゆ山より見し志賀の浦　同
え
一 夜をゆはさらさらぬしそれきさき　同
けさ
一 雪さらりふかきゆきゆき乞花宮　同
一 脇の文の事よく発句の心に付けて其時節に
たとへば分けりちひ其は
なんとやうとは一つやさしさのやうなり
一 第三の事前の句の寄所は大形ひとつ一句のなかにて

そうけんくん大?に東三色大略てとゆうりはくは
ちの字あせんハ文をおしては(?)かにこのもすいらの
三礼かなまた其年句のやうは
一通八句のうち十句目までに定るす神祇尺教
恋無常述懐名所なとかさし出すのこゝろなり
○てにをはの事
一色こ(?)のし　現在のしとても
そのし　過し　見し　きくし
これらは色こ(?)のし
と練し　ちし　わ練　ゑし
これハ現在のし也

此現在のしはくいふかとをもてとめしゆゑは
音もゐりしこほりぬ音のたえれか
松か練しみ山の雪の消をそて
なやうの句をてつまえちつひとしは色こ(?)のし
はくハとありしなり
松ハきうの家奥のうえの雲
舞はちやむるひのきしゝ嵐をせて
見えてはまちつひとしは

一こそとりてハりあ家もとめ守しは　まとハとめ
りしは
一そとりてハ海ととめりしは

一 もと◯字(じ)の事 何とてなかにかなし是等(これら)は
もと◯申ははねかりてやといふもと◯申は此字(じ)など宮
もと◯これなし

一 一字もと◯と申事りんなんせん
右(みぎ)の字なくしてもと◯申は
○当世嫌(たうせいきらひ)申ゆう付の事

一 弓(ゆみ)ま弁来(べんらい)もとをとも

一 胴龍(どうりう)旁(かたはら)雷(いかづち)はおりなひくとて付く事
右付やうよくしりて嫌(きらひ)申は

一 りせすゑもを とすひくまと云句不足(ふそく)ゆき付るは不出来(ふでき)

一 のまに毎るは付てよくく

○一句(く)の道理(だうり)やすくをもし連歌(れんか)のうす

一 あそびとりあすはかゝは合(あひ)はやみさせ
毎(まい)ともなくさかやすいそれをは

一 守(まもり)ましよりおそくに座(ざ)をすま
毎なくしてまもちるとはせすく

一 極(ごく)まと景(けい)気(き)象(ざう)多(た)を抑(おさへ)て咲(さき)出(いで)よく
花(はな)なくいひて

一 古(こ)つらひとつきを初(はつ)春(はる)とそなく
名(な)なくいひて

古今(こきん)○奇(き)なはやうまよと申しは
当てへいそのつ時風(じふう)まちる花と

四十二

誰よおもはせてこそ詠なくらの雅

〇同意(どうい)の連歌(れんが)

一 うちむかひて月と見るころ
秋乃霧更(ふけ)えて関(せき)もさはし
一百韻の更(やう)とおもへくせんなくは茶句の月よ
くらくつまく

一 ゐなかにてたつ花と見えく
宇ちうまに盡乃木乃(こ)ま
かやうの付(つけ)は花(さう)のめけりうらなくは

一 花といふ文字(もじ)をあらそふ
河岸(きし)に霞(かすみ)やまつさの咲(さき)きそひく

是等(これら)も同意(どうい)なるべし

一 花といふ文字をあらそふ
宮(こと)の松(まつ)ひらの言(こと)葉をやそへ歌らん
かやうな付句は古今(こきん)に沸稽(はいかい)も同前(どうぜん)

一 道(みち)のべなる草(くさ)をみしらぬ
物理(どうり)を一口(くち)にいひてやまく
一句のうち物をいへ物をなくて田舎(ゐなか)にのみあるく

一 海川をへだてもへだてぬをなれも
是(あ)つらへあつらへに物出来(でき)がたく
同意(どうい)なり

一 海川をへだてて見るをいくとのへを

たはけたるはかなき紀行にありてそ
かやうなけるのやうく
一見しけくまつく
ゐひ家の月日ハかつらん
是をよく付やうは

菟玖

一見しけくましく
風さそふ柳のなへに花咲きて
或人のよく見て付られたるの句の道理な
きやうしやは
宗祇ハ愚の句人をよせてなまじ句の證也
やうゆうとなる

一雪まれなるみちのくにて
しかしふ上手の連歌ハ数多く人の中に
来らく〻は

○たしめの蓋の言葉
一季の詞　年のうちよき詞ハ奇妙ならず
よろしくとも連歌ならぬ色の季は付ん
一手あして　一海の年　一若水　一門の松
一筆試　吉書の一寂
まつ詞より書の蓋まて付ん
ゑみすむハ恍惚ハ月燈
くハ秋寂ハふ付

一鶯（うぐひす）　始終（しじう）わ何とのあかり

一子日（ねのひ）　ち川松のゆかり引ハ此日松を引ハ命（いのち）
とのふつゆかりひと引つきつり

一若菜（わかな）　正月七日七草（なゝくさ）とはゆかりのちハ　芹（せり）　薺（なづな）
こきやう　あびしこ　佛（ほとけ）のさ　すくな　すゞ
これ是も七草よ

一雪間（ゆきま）　雪消（ゆききえ）　雪解（ゆきどけ）　雪きえねと
ゆても春なり

一氷（こほり）とく　おすする　一氷わるむ　一おほろ

一うそむく　一長閑（のどか）　一鳴えつゝ　一東風（こち）

一わかる　白ると書てわかるとよみ　此間月

春之

一梅（むめ）　七日たくだれ若ゑとく内裏（だいり）にわたる
浜御んも何事や
冬来たれ（ふゆきた）く物そえて六首にて春に仕へ公二
月まてを詠みやうに仕へ宮様の数多り
春なれハ冬の梅咲み山の郷深山にさきし数よ
冬木の枝に絶て咲なり
一花乃兄（はなのあに）　梅のさと　一柳（やなぎ）　是も始より来る仕人
一下のえの草よ　一咲のうちも世上　一木のめ（このめ）　一若草（わかくさ）
一うかる　一さわらひ　一朧月（おぼろづき）是も始終仕候
一きさらき　さしとも同前（どうぜん）　一鶴（つる）さか　白尾（しらお）の鶯
つま尾（お）の鶯

なに鳥も何も春なり

一いそは　春のひばりさへづりくとそらの雉も見へ入

一ちど鳥　一呼子鳥

一かゝ鳥　一鷹け野

一あざみやけとて

一せくろのすゝれ

一む月　正月の事也

一去年　一さわひめ

一春とつきどり物なり

一わざめし　お事の人々

と読めるを云われは田舎之

一みとしの邑令

○中の春乃玄葉

一常人も　二月末より三月まで

一花まつり

一春月より一みなと迄八幡放生の祭之酒裏

めく行なり

一鶯の囀　正月より三月までなり　蟄虫春也季也
暖気を得て虫出るとしは

一蝶々　正月より三月迄なり　一蛙

竹の若葉のこと　一松の若みどり　松の若
一玉の雨くもと

とりさては雑なり並別みどりとて季とする
なし唐の書に見へたりと表に聞は日廿日雑之

一松の花　雲母は十久つもして花の咲より以千
紅みより五六春にくは
がりより十代より此やし以一　一松の花　此様に云春

一ひきまく　一初桜

一佛乃お　一さくら

一ひな祭り　一わかれじも　是ハ初音九郎丸
右母もえなしかの藤といふ名也　正月十日
と十六日に京中の歌よミにんとわかれ
ゐたのうへひとりよりしむる年わかき是とあり
まづしうとくいふの
○きよゐの嘉九言葉
一ながれ日　一九の日九候　三月のみの巳の日を
かつ盃をうかべくわきひとなると日本母も為
と酒呑をひえ曲水の宴よく三月三日
を家なり
すかんのさと
一あしの花　一花ざかり

一桜ちる　桜をゑまじ鳥　一桜人　一桜田
一桜鯛　一桜貝　一りうめ　一りうあ
一ゐなの欠　一蛍　一山つき　一弥生　三月
一葛の芸
○初春の言葉
一数久　春の数とかく男の数とう云ふ一時鳥
是ハ鄙回なるやうに仕たなりの娘の夜
より月同くもまりやうに仕へ鷺に時鳥
ともいふ夜なり
一餘花とハ　若葉のうちに数の残里を申也又
時鳥ハ花とむさしくもなりける

一若菜とハ正月初の子の日若菜をつむ事也 草の
わか菜ハ春なり
一くれつかたに薺母子草ハ春也 又人連歌母子草を冬
一牡丹 ふかみ草とも 又廿日草とも卯月と是も夏也
春なり
一夏木立
一茂の草木是も六月まで也
一卯の花 さ月花仕
一楓
○中の夏
一あふひ 四月より六月までなり
一ひるのまつり
六月晦日 十八日夏越とのかる湯の祭の日の
一榊とる
一神まつり
一日数の日

事なり
一きそひ馬 百草をとる事也
一きさひる 競の事也
一おかひ
一早苗
一かきつばた
一ゆりの木
一若竹
一五月雨 梅の雨ともいふも五月の雨也
一水鶏
一あやめ
一鵜
一鵜かひ舟
一蚊遣り火
一ほとゝぎす
とよりもさかるさいの事なり
一めとる
一ところ
一よりし麻
一[illegible]ひるまき
一世見
一ひし
一雑秋 わけやもち秋まき
一とこ鶴
夜の秋なり
一夏つむ花 むかしの花の事なり
一毛をすつる鶴
○すゑの夏

一御室
ねずみのひかり宗祇の発句懐にもひとつ
一ちちもと 一なでしこ 石竹とも云
まわもへ入
一わぢさい 四ひらの花九仕入
一夕がほ 一ぬめり 一さゝわさ 昨わさの名
なる桜の時分麻を蒔ゆへ
一見る 一なれそ 夜河のやうなと同し
一ゆすら 一扇 うちわといふも扇の名に用ゆ
うちわやうのものを扇といへるゆへなり
一あつさ月 一泉 一清水むすふ 清水と計は
夜にわゝもと 一門前の 水上に結
それく夜ごろともいふなり

一みそぎ 六月晦日水無月の祓ともいふなり 総も
晦日おほはらへ 賀茂河のみそぎ六月
なごしともかんいふ
一こぬ秋 古今集
こぬ秋の名は言葉をかへてすゞしさなり
むすぶ手の山の井の水とよむは山の
井のあまりに涼しき事と申さんとて秋や
まことにこぬを秋来ぬと又秋の名にて
落水結ふ手に涼しと讀るなり涼しきと
いふは同意の付句にあつき日清水結ぶ
扇子むすぶも付ると扇子むすぶなとも

同意なる風に扇は始風計の貝にあく
ともかざしも絶るわ舞の時扮物なる文机

一林の鐘　みをしおくわ　一雲の峯　一あをむしろ　内で連歌ま
流不はへ　初秋

一秋立　一葉　おもしの葉も葉も落る初
秋みん梧　梧桐一葉落天下秋と知りしる梧
桐の葉なりとりなるつしん

一七夕　天河　としの渡り　秋去衣　結ひの糸
星合み　七夕の事なり

一朝ぐもし　一残りあつさ
一秋あつし　一扇を置

一残暑　始終わり
一月　初中後

一霧　初中後
一柳ちる　一ひあふぎ

一こきり　一いなづま
一身にしむ　人とに驚秋

にふくん　初秋ふくは初中後ならる

一虫　初中後ならる
一松虫　初中後ならる

一鈴虫　同前
一きりくもとえる初り同前

一荻　同前　荻の数々とりし風の音は唯荻也
住々風にはこゝ方ゆしは風とよる用と結

一薄　一とりくへし
一まつや
一あらて夜　一萩

一女郎花
一草花
一早田
一色づり

一ひやゝか　一さび鮎　一きせ綿　一月草　つるくさ
一鳩吹　秋乃初鳩ととりとく鳩のまねをも吹之
一すまふ　ことりつゝひとゝも内裏乃節会なり
一[illegible]　一文月　七月なり
○中乃秋
一麻　きぬのせぎ麻乃異名なせぎは旅よわるぞ
一鶉　うつ衣は擣衣なり　一小鷹狩
一鷹　一初嵐　一きり雨　一思ひ草
一星月夜　星の光乃月のごとくなるを云
一なりひさご　一[illegible]　一くず　一あさがほ
一田を守　一鵙のくさぐき　一長月　九月

一駒むかへ　きりはらの駒を内裏へひくなり
八月十五日のまへに相坂まで勅使むかひに迎
をこまむかへとは申なり
一初塩　一野山の色付　一初紅葉　一きし
一もうそ　一こり　一文鳥　一ちゝさ
一擣衣　衣うちあくるの音とも云　一長夜
一野分　一葉月　八月なり　一ややさむ　一とやでの鷹
一初あらし　一いなづまと稲一ひさかたなるこの事なり
山田のそほづと同前なり
一むくげの花
○すゑの秋

一とほ里の野山(のやま)　一庭たゝき
一たきぎ草(ぐさ)　菊の異名(いみやう)なり
一秋さむ　よるもすゞしくなるは秋よりまへと秋をさむしと見
とは冬なり　一そゞろさむさ
一荻のかせ　芦の花見え
他の字あり
一やゝさむ　やゝさむの薄(すゝき)のほにて
一わさめ酒　一とせねかく
一霧時雨(きりしぐれ)　てんも[illegible]
初時雨(はつしぐれ)は冬と号(がう)すといへども秋の初具(ばく)なれば
ひとへ秋なり　一ひつぢ
一露霜(つゆしも)
一千鳥(ちどり)はかるとも鳴(なく)ともいへば秋なり
一くつはむしや　葦の秋なり

○初冬(はじめのふゆ)
一時雨(しぐれ)　始終(しじう)仕は
一木の葉(このは)　木の葉衣(このはごろも)
一炭竈(すみがま)　一綿
一心(こゝろ)　神無月(かみなつき)
○中(ちう)の冬
一霜(しも)　一寒(さむき)
一霰　あられも始終(しじう)仕く
一冬ごもり　一わらふ
一千鳥(ちどり)　始終(しじう)によする
一神(こう)　一ひと　一ふゞき
一枯野(かれの)の露(つゆ)　一めしつけ
一鴨(かも)　一みぞれ
一雪　一水鳥(みづとり)　冬中(ふゆぢう)によする
一ふるひ　一あられ　一薄(すゝき)枯(かれ)尾花の枯(かる)る
一さよのわらりの節分(せつぶん)　節分母(?)は年の豆(まめ)と秋よ
そまうきのちまつるとるとし　冬(ふゆ)にするなり

冬廿二

一とみ衣　芭蕉翁の弟人のぎきゝかなり
一目のけの糸　目く草もく草とうかなにくあとなり
芭蕉翁の弟人の道具なり
○蕉翁発句
一神楽　一庭火　神楽の時なり　一曜大宇之
一早梅　一早春桜　一春を待　一春ちうくさ
一年のうちの春　一志もます　一年の暮
○玄葉一冊でん二本の事
一うこん　一冊は村梢二すん赤し
一あされ　一冊はあされむ歌二すん面白ん
一うこと　まきしのん。　一をさぶ　一冊は我もさぶとれ

一湊　源事なり二冊は否かりもとさぶいやむすく同風也
きふとは吹す風吹もとさぶいきやむするなり
一見てくま　一冊は方の源家なり二冊は水まくあく
一ひろしら　一冊は人の中よといふなり二冊はしこあそてを
まあうするなり
一庭さき　一冊は物帯なり二冊はぶつしきなり
一きえく　一冊は物のあくし暑なりへく二冊はあそして
とはとかさく怨恐もふんなり
一みさお　一冊は物のあんぜもさ女とくねするなり二すん
水棹といふなり
一みそう　一冊はひそうなり二冊は晦なり

一あやなし　一字は道なしにて二字ハあとさきなしになる
一殿ともに　一字ハともかく二字ハ常のごとし
○言葉一字ハくん二字ハ音の事
一長のぶ　一字ハ人によりてかはりて二字ハ恋しくもおもふ二字ハいん字ん
一ものゝ法　一字ハ命のあり二字ハ長くして三字ハ名によりて法と書
　かむはかるなり
一かゞみ　一字ハ人の口をひらき二字ハかゞと云字のちかひ二字ハきよきひのうつるなり
一なかめ　一字ハなかむる心二字ハ寺の心三字ハ長雨なり
　いひかはすなり
○恋の詞

一ちぎりしに　約束なり
一又称　我てめり
一えにし　縁の事
一ゆめごと　秘すこし
　あすしきんなり
一こゝろつく　おもひあへしこと
一なつさふ　なれて
一いなせもせぬとハ　いやなる添たる
一やまれぬ　けいせい
一かいまみ　そと見えそむる
一あさもの　わぶみちのかき
一こまぬくとハ　別の事也
一後の朝　我ての約
一秋むら　魚なり
一むつごと　むつましき詞
一ゆふざと　道約束
一夕ぐれうき　夕ぐれ胸騒
一ねまきこそ　なれ給ふらん
一うちつけ　初
一うかれめ　けいせい
一おもひぐさ　思ふくりかへし
一わかしん　わかの心さかりさ

五十四

大学ひ珍用

一 恋をさする　こひするよ
一 めくりせ　めくりせもち
一 よるべ　よるの衣
一 こひのやまひ　こひやみうて
一 みだれ枕　みだれ人の妻
一 秋のをしき　秋の人のやう
一 忍ぶ草　偽の捨物
一 こころさ　只と思
一 なくてみ　名のたつ
一 中と思ふ云ふ　忍と我との中
一 もぐろ　心なしもとより

一 きぬぎぬの別れ　ありかさ
一 ふかく　秋しと合こんなくと
一 二つ枕　初夜
一 こころす紙　きそれを云ん
一 みしろ　あとさぐりて
一 こひ病　只恋となふ
一 こひ草　唯わと思
一 こりと思　思ひぬるし
一 あやなく　人のなくさし

一 こひの煙　おもひをと火よりをつく
一 思のまつし　いつの恋とおもひ行きしきあはれ
一 男とおもふ　おもひのかはり
一

一 衣の人をと　なけきのかはり
一 うつへ　おもんそうし
一 くろおもひ　人の思よ
一 ちぎり　よびよ
一 あさくく　まとひのあぶらく

一 こころなき　人をなき
一 あひたひ　わすらも
一 ふくべ　あびのん
一 人めのせき　人をげくそ実

一まん形こ　となり　一な由めり　うらくしき
○雑の云葉　ちんちよのん
一朝まき　朝さく　一朝かけ　朝乃みえ
一あけくれ　明行時くり　一朝なれ　朝の静
一朝なけ　朝ふを兄朝夕
一朝け　あさなり　一朝附日
一朝い　朝ねるり　一朝とく　朝とく出
一ひ分り　ひ分の中　一夕まへ　夕ぎ露まさ返
一夕塢山　夕への山　一夕雨もひ　もひまちやくめる
一くれまよふ　なき都の事　一夕ぐれ暮　夕への事

一山ろう　暁の雲と云　一さよ　さの字そへ歌
一さよひの月　十六夜の月とも云　帷やとるへきもあり
一雲の浮橋　蒙のうち　一蒙る人　めうと云こと
葉のうつ付てつくる蒙のさきらそうふ成蒙あり
一むら玉　野と云枕云葉まり　豊列ろうきるすの枕とに
一わしひき　山と云枕云葉なり
一わめつち　天地のうち　一わ○○　此と云枕云葉の
一久堅　空月并すての枕云葉あり
一あさまへ　枕云枕詞　一みいりさ　名残と云枕詞
一雲れくるて　夕の雲乃ちうの折まりひくみてるとよ
一雲井の庭　内裏の事　一百敷の中　同

一鶯宿りし梅　内裏よりめされ咲花なく里にわたしき

一まづしき　帝王の事　一春乃宮　親王をいふ

一敷島の道　哥の事　一やまと歌　同

一難波津の道　同　一むくさ　同

一夕つげ鳥　鶏の異名也　一鳰の巣　雑なり　哥に契ある之

一鳰の浮巣　雑也　一山鳥の尾　山鳥の尾

雄と隔て尾のかげを見るとて恋ひくらす

と山鳥の尾のかゞみとあり

一野守の鏡

野にある水を狩場の鷹それて見たるに

と野もりがのぞきの水にうつりたるを

見たる野守りのかゞみと云なり

一ゆまつり　あふ行法の名　一ちかひをうけ竹の事

一心の松心の杉　禅せるなり　一苔莚　苔莚むしろとおなじ

かくなりと云標物なり

一松風の琴　松風を琴の音にやそふるなり

一河音の琴　河音を琴にやそへなり

一木の葉の琴　木の葉を雨とやそふる縁物之植物之

一草枕　旅之非植物　一草を枕に　植物なり

一から衣　からそめの衣装束等のことなり

一篠枕　植物なり　一波枕　旅之舟なく

ても舟之磯や浦里あるく波をやそへし

一うち枕　[illegible]てせぬ之　一渡し守　[illegible]てせせ

一えいせ母　河母なりえいせはたゞせと計を示名なり
一ぬ中いろひ　京田舎にてわ辨なり　一さむらへ　なる（？）なり
一ひなびたり　ぬ中めきたり　一あ見こち教　なまいきん
一いつきせ　廃敗な世　一さがれき　しれしき
一ゆしき　それ敷なり　一志のすり　はなはだなり
一玉ゆら　すこし　一いそくめ　志げしなり
一あげなれ　母わすれぬなり　一よしみ　祝言なり
一ことふき　同前　一はしめく　約さしくせ
一なちめ　花おろり　一はらなし　やさしき
一ねたし　にくし　ねたましくもと　一むべ　げにもなり

一ゆかり　縁者なり　一とのゐ人　番衆
一かぞいろ　父母なり　一このかみ　兄弟
一のちのおや　継母継父　一まらうど　客人
一友どち　友だち　一家づと　見やげ
一うゐかうぶり　元服　一はくもみ　はくもの物名
一おいらく　老のすゑ
一しをり　道のしるしと木の枝おりかけてしるしとなり
一さくらがり　山のさくらなり　一ちまた　道の辻
一みちのべ　道なり　一ひぢつきさね　衣装袖と
一村雨　季なり
一おもし　重き　一ふるおき　年長古人

一[illegible]しらう　成人さする　一[illegible]もなし　めんがくかさ
一[illegible]ともし　ちづしき　一ちちきに　綾絵の下絵
一[illegible]し肉　桐棺　一いつの　丸盗丹の家新
一なし井　[illegible]しおる新　一猪ゐ　縁をとおろく
一あけの[illegible]舟　うづろう舟　一空の[illegible]　琵琶うり
一むま[illegible]ち　琵琶のす　一あけまや　空句へあまぶれ
一まや　やしきうち　落つ家
わまよれ二月[illegible]
一志のより　志けきん　一いさらに　神れぬ
一人やうちぬ　んう新　一んづく　帷んし
一よしさい　よし仰しが　一さらとも　さわまとも

此一帖は日の本と一とせ[illegible]
きんより天下[illegible]の[illegible]
やまと[illegible]と[illegible]
と[illegible]のよ[illegible]の代までの[illegible]
[illegible]よあひ[illegible]ひと[illegible]
三十とせ乃[illegible]の秋の[illegible]老之

法橋紹巴

寛永四年ひのとう　正月吉日

[illegible]

情以新為先 求人未詠之心詠之 詞以旧可用
詞ハ不可出三代集ヲ 先達所用 新古今古人歌同可用之
風躰可効堪能先達之秀歌ヲ 不論古今遠近
見宜歌ヲ可効其躰ヲ 近代人所詠之心詞 雖一句
謹可除棄之 七八十年以来人歌所詠出之詞
心詞ハ努々不可取用之 於古人歌ニ多以其同詞
詠之 已為流例 但取古歌詠新歌事 五句
三句者頗過分無珍気 二句之上三四字免之
猶案之 以同事詠古歌詞 頗無念歟

館石依右衛門
重立

以花詠花 以月詠月 以四季詠四季 以戀詠戀
三句詠之 以時ニ古歌ヲ取 難免
足擬古歌
此哥等ハ 雖為古哥
みよしのゝ山 久方の月
不詠之 年ノ内ニ春ハ来ニケリ 一年ヲ去年トヤ云ン今年トヤ云ン
さくら花 ちりぬる風の なごりには 水なき空に 浪ぞ立ける
詠之者也 古不可詠之
常観念古歌之景気 可染心 殊可見習者 古今 伊勢物語
後撰 拾遺 三十六人集之内 殊上手歌可懸心
人丸 貫之 忠岑 伊勢 小町等之類 雖非和歌之先達 時節之景気
世間之盛衰 為知物由 白氏文集第一第二帙常
可握翫 深通和歌之心 和歌無師匠
只以旧歌為師 染心於古風 習詞於先達者 誰人不詠之哉

GANSHODO·SHOTEN
KANDA TOKYO
東京神田
巖松堂書店